特殊血液疾患を有する妊婦について

福岡大学産婦人科
白川光一

自己免疫性溶血性貧血の1例

妊娠35週，初産婦

主訴：高度貧血（⊕中毒症）

検査の結果（含　骨髄像），Hb：4.6 g／dl，RBC，133×104で，直接クームステスト・卄，間接クームス試験も陽性（4倍）（但し抗体の同定は不能）であり，自己免疫性溶血性と診断され，直ちに入院。

入院後は輸血やプレドニン投与などにより，やや改善の兆がみられたが36週末分娩に至る。児は1,840 g と smoll-for-dates babyではあったが，貧血は殆ど認められなかった。

本症例から，母体に貧血がある場合も，児には，母のギセイにおいて，鉄をはじめとする造血因子などのsupplyが行われるという傾向がみられた。但しsmall-for-datesではあった。

これと類似の傾向は，3年前に経験された高度の再生不良性貧血の症例（Hb は妊娠23週において3.5 g／dl）の児においても認められた。

なおRH式の欠落型variantたるRhnull（……1……）の妊娠例を53年に経験したが，本症例では，いわゆるRhnull discase（Rhnullの血球は膜の脆弱性による溶血におちいり，貧血を呈するという）は認められなかった。

妊婦の貧血と周産期障害に関する研究

国立岡山病院　産婦人科
藤森　博

1. 研究目的

妊娠時に認められた貧血が母体ならびに胎児に如何なる影響を及ぼすかに就いては，全く影響が認められないとする者，影響ありとする者など未だ意見の一致をみないのが現状である。然し妊娠時には非妊時に比し妊婦の鉄の需要が増大し，鉄分を十分補給しなければならぬことは勿論である。我々には妊娠時に認められた貧血が妊娠・分娩・産褥において母体並びに胎児・乳児に如何なる影響を及ぼすかについて調査した。

2. 実験方法

1）非妊婦1,144名の血液像を調査した。

2）妊婦の血液像を妊娠前半期・妊娠後半期並びに分娩時にわたり連続的に測定し，それぞれを非貧血群と貧血群に分ち，貧血群をHb 値10.0〜10.9，9.0〜9.9，8.9 g／dl以下の3群に分ち夫々の分娩歴を調査した。

3）妊娠初期に於ける妊婦を非貧血群と貧血群に分ち，夫々の群に於ける早産・巨大児・LFD・SFD・LBW・妊娠中毒症発生率を比較検討した。

4）妊娠後半期に於ける妊婦を非貧血群と貧血群に分ち前記の項目について比較検討した。

5）出産入院時に於ける母体Hb 値（以下分娩時母体Hb 値）を測定し非貧血群と貧血群とに分ち夫々の群に於けるApger score・早産・巨大児・LFD・SFD・LBW・妊娠中毒症・分娩時異常出血・産褥感染発生率を比較検討した。

6）分娩時に於ける母体血液像と臍帯静脈血液像を分娩時母体Hb 値別に比較検討した。

7）分娩時に於ける母体血液鉄値と臍帯血血清鉄値を分娩時に於ける母体Hb 値別に比較検討した。

3. 実験成績

1）非妊婦に於ける血液像

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

自己免疫性溶血性黄血の１例

妊娠 35 週,初産婦

主訴:高度貧血(e 中毒症)

検査の結果(含骨髄像),Hb:4.6g/タ,RBC,133×104 で,直接クームステスト・廿,間接クームス試験も陽性(4 倍)(但し抗体の同定は不能)であり,自己免疫性溶血性と診断され,直ちに入院。

入院後は輸血やプレドニン投与などにより,やや改善の兆がみられたが 36 週末分娩に至る。児は 1,840g と smon ・ for-datesbaby ではあったが,貧血は殆ど認められなかった。